

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



▲柴籬神社の反正天皇丹比柴籬宮址石碑(左:大正8年、右:昭和19年)



▲『河内名所図会』に描かれた河内大塚山古墳の社殿と巨石(丸印)



▲河内大塚山古墳の石室材と思われる「天満宮」手洗鉢(上田7丁目・柴籬神社)



▲河内大塚山古墳(松原市教育委員会提供)手前が北方面

河内大塚山古墳の伝石室材が反正天皇丹比柴籬宮址に移設

今夏、百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に決定しました。大阪府で初、国内では二十三件目となります。堺市の百舌鳥エリアと羽曳野市・藤井寺市にまたがる古市エリアにつくられた四十九基の古墳で構成されています。四世紀後半から五世紀後半にかけて築造され、墳丘の長さが四八〇メートルの仁徳天皇陵古墳(大山古墳)や四二五メートルの応神天皇陵古墳(菅田御廟山古墳)など大規模な前方後円墳が集中しています。

松原市民の方々も、巨大古墳の世界遺産登録に関心を持たれる一方、「なぜ、日本で五番目に大きな河内大塚山古墳が世界遺産に選ばれなかったのか」と質問される方も多くおられました。

河内大塚山古墳は、松原市東部の西大塚1丁目と羽曳野市南恵我之荘に境界を接する全長三三五メートルの巨大前方後円墳です。まわりには濠もめぐらせています。現在、宮内庁管理の陵墓参考地です。江戸時代には、おもに平安時代初期の阿保親王(平城天皇皇子)の墓と伝承され、明治時代後半ごろからは五世紀後半の雄略天皇陵ではないかと考えられるようになりました。

しかし、その後の研究で、河内大塚山古墳は古市古墳群の中でも、巨大古墳がつくられた最後の六世紀半ばから後半ごろの築造と位置づけられています(「歴

史ウォーク」8)。私は大塚山はもともと欽明天皇の陵として築造され、ほとんど完成していましたが、結局、天皇は葬られず、今の飛鳥(奈良県明日香村)に新たに欽明陵をつくったと考えています。

ですから、河内大塚山古墳が登録されなかったおもな理由は、(一)立地場所が、百舌鳥と古市地域の中間地であり、単独で築かれていること。(二)築造年代が六世紀中～後半で、今回の登録条件が四世紀後半から五世紀の古墳に限られていたことによります。

今後、百舌鳥や古市の古墳群に多くの観光客が来ることが予想されますので、本市にも六世紀代最大の河内大塚山古墳が存在することに注目を向け、人々の関心を高めることが必要となってきます。

観光客の人々に松原にも足を運んでもらうためには、世界遺産となった反正天皇陵古墳(田出井山古墳)が堺市堺区に所在していますが、あわせて十八代反正天皇が王宮(ミヤコ)とした丹比柴籬宮が、柴籬神社(上田7丁目)が鎮座する地に伝承されていることを周知すべきでしょう。同時に、河内大塚山古墳に設けられたと考えられる被葬者の石室材が、古墳から同社に移され、手洗鉢として転用されていましたので、同石を顕彰することも重要です。

柴籬神社西入口に、大阪府が大正八年(一九一九)に建てた「丹比柴籬宮址」碑があります。南門にも昭和十九年(一九四四)一月、同じく大阪府が建てた「反正天皇

柴籬宮址」の石碑が建っています。

参道を進むと本殿に至る石段の西側、参集殿前に手洗鉢が置かれています。河内大塚山古墳には江戸時代以降、昭和三年(一九二八)ごろまで数十軒の集落が形成されており、丹北郡西大塚村や同郡東大塚村の氏神である天満宮(大塚社、菅原神社)が前方後円墳の後円部に祀られていました。

享和元年(一八〇一)に発刊された『河内名所図会』に描かれた河内大塚山古墳の頂上に社殿があり、石段下左側に数個の巨石が見られます。これらの巨石が石室材で、その一つが神社の手洗鉢に転用されたと思われる。

明治四十年(一九〇七)十二月十八日、東大塚村の天満宮が柴籬神社に合祀され、手洗鉢も古墳から神社に移されました。裏面左側に、「天満宮」の文字を刻んでいます。右側にも「享和元年九月 東大塚村氏子」とあり、享和元年に東大塚村氏子が天満宮に奉納したものです。黒雲母の花崗岩で、岩相は柏原市平尾山から青谷にかけて分布するものと類似しています。同地産の石が六世紀に天皇の墓室として構築された可能性があります。

河内大塚山古墳は宮内庁の管理に置かれ、立ち入ることができません。しかし、墳丘をめぐる濠のまわりを一周することができます。二〇～三〇分ほどで完歩できます。反正天皇を祭神とし、石室材を見学できる柴籬神社も近くですので、歴史健康ウォークのコースとして歩かれることをおすすめします。